

2015 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

— 一次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

政治という活動はある集団(典型的には国家)の目的なり利益なりに向けて自己決定し、それを実行していくことをめぐる諸活動である。政治はあくまで集団全体のあり方に関わる決定とその実行をめぐる活動であり、政治的統合はこうした活動の方向づけを担うものである。政治的統合が如何なるものであるかを形式・内容に即して自覚的に追求したプラトンの規定によれば、ポリテイケー(政治術)とは「ポリス全体に配慮」する包括的知識を意味する(『ポリテイコス』)。ここでは物的資源や人的資源を駆使し、それらに方向づけを与えることに特徴が求められた。つまり、それは何か一定の行動を自ら行うことを予め念頭におくものではなく、あくまでも諸々の物的資源や人的資源を指導し、導く「王者の技術」としてイメージされていた。ここにはプラトン自身の政治術の内実についての独自の見解が流れ込んでいないわけではないが、政治的統合の端的な側面を示したものであることは疑問の余地がない。どんな政治家でも切羽詰まると最後には、「国家、国民のため」という殺し文句を口にするのは今も昔も変わりはない。

政治的統合という言葉には、その具体的内容をめぐってさまざまな見解があること、主体間で意見の対立があることが予め想定されている。実際、そうした見解の相違がなく、あるいはそれを問題として考える必要がないのであれば、統合といった言葉を事新しく使う必要はないであろう。注目すべきは、政治をめぐる古来の議論においては、こうした統合問題そのものを如何にして発生させないようにするか、逆に言えば、見解の相違が生じないようにすることに非常に大きなエネルギーが払われてきたことである。そして、そうした状態こそ理想の政治であると考えられてきた系譜がある。これは政治的統合という概念の意味を裏から理解するためにも、予め検討しておく必要がある。

例えば、東アジアにおいては、「無為にして治まる者は其れ舜なるか。夫れ何をか為さんや。己を恭しくして正しく南面するのみ(何もしないでいてうまく治められた人はまあ舜だろうね。一体、何をされたくか。おん身をつつしまれてま南に向いておられたただけ)」「(『論語』衛霊公篇) というのは古来から一つの理想であり、「無為にして治まる」ことは統合が自ずから成立

している事態である。(1)、「論語」にしてもこうした状態を実現するためには多くの努力と苦勞があったことを伝えており、自ずから実現したように見える状態も働きかけや作為なしに実現するものとは考えられていない。その限りに置いてこうした「太平の世」を実現するためには教化の担い手が必要であり、その担い手の教育こそ儒教の任務であった。

古代ギリシアにおける政治的自由の開花と意見の対立、それに伴うダイナミックな政治史は広く知られている。それは政治的統合の担い手を変えたのみならず、その手続きや政治的統合の基本理念をめぐる多くの対立を次々と生み出した。プラトンの「哲人王」という構想は、そうした統合問題の政治化が果てしなく進行しつつあるまっただ中において、一つの真理とそれを根拠にした包括的知識としての政治術（ポリテイケー）によって統合問題に決着をつけることを明らかに意図したものであった。

真理と権力との一体化は当然のことながら、それに挑戦する知的・道徳的權威の徹底した排除を内包せざるを得ない。一言で言えば、人間は新しいポリスにふさわしいように「浄化」されなければならず、そこからホメロスに代表される伝統的な知的權威が排撃されるのみならず、一〇歳以上の者は「浄化」のための再教育に耐えられないことを根拠にポリスからハウチク(2)されなければならぬといった議論が出てくる。これをプラトンは「画布の汚れを拭い去る」という言葉で表現している。「浄化」と教育の徹底によって政治的統合はいわば問題としての性格を失うことになる。

この「哲人王」構想は多くの政治論において遠い理想として、あるいは、現実離れたユートピアとして受け止められるに止とどまったが、しかし、この背後には真理(3)と権力の一体化という重大なモデルが潜んでいる。実際、イデオロギー政治の時代にあつては、このモデルは圧倒的な存在感を持った。特に、マルクス主義の歴史を顧みれば、それは歴史的な現実の問題でもあり得た。レーニン、スターリン、毛沢東といった統治者は同時に哲学者とされ、真理をめぐる争いが権力をめぐる争いと常に連動する可能性を内包していた。ここでは真理をめぐる対立は政治的統合の担い手の間の対立につながり、時にはシユクセイ(4)につながった。つまり、このモデルにおいては真理は一つであり、政治的統合における対立そのものがあつてはならない事態であり、従つてそれは然るべき形で理論的に「解決」されなければならないからである。

意見の対立を真理モデルによって「克服」するのと違つた、もう一つの、最も広く見られた手法は、権力の威力によって異論

反論の余地を押し込め込むという方式であった（ちなみに、二〇世紀において前者は全体主義体制、後者は権威主義体制というようにしばしば使い分けられた）。人間の内面にまで立ち入って統合を模索するのではなく、外面的な規制や「恐怖」によって統合を現実のものにすることである。この場合には「恐怖」を与える統合の担い手の存在そのものが極めて重要であり、真理による権力の支えは期待できない。従って、その担い手の運命によっては政治的安定が一気に崩壊する可能性がある。極端に言えば、一人の人間だけが自由で、他の人間はその従者や奴隷であるという構造を持ち、この一人の人間がいなくなれば統合を支える基盤はなくなり、急速に無秩序に転落する可能性を秘めている。マキアヴェッリはかつてフランスとトルコを比較して、前者は征服するのは容易であるが、それを維持するのは難しい、後者は征服するのは難しいが、それを維持するのは容易であると論じたが、それは後者には抵抗の核になる政治的統合がないタイプだからであった。

ここで紹介したような政治的統合を道徳・倫理や真理によって置き換えるモデルや、絶対的な権力行使によって置き換えるモデルは、皮肉にも異論や反論、多様な意見の横行が現実には如何に通例であるか、一般的であるかを逆に物語っているといえよう。プラトンは『ノモイ』において「万物の尺度は人間である」という見解に対して、「万物の尺度は神である」と反論している。しかし、この尺度としての神にしても、人間による解釈と理解なしには人間にとっては意味を持たない。神は人間による人間の支配の道具であるとまで言わないとしても（当時、そうした議論があったことは残された断片からも知られている）、⁽⁵⁾人間の介入なしには神は政治的統合の支えにはならないのである（そして、今度はこの解釈をめぐって人間たちの間で異論反論がフットウしたことは周知の通りである）。

全てを見通すことができる存在（神）にとつては、具体的な歴史・社会状況の中であくせくと「選択」にこだわって生きる人間の直面する課題——政治的統合はその一つである——は意味を持たないであろう。しかし、個としての存在こそ人間の原点であり、与えられた条件の下でその運命を甘受するだけでなく、よりよい可能性を求めて「選択」し、それなりに責任を果たしていくという人間の姿は、自由主義といったレベル以前のより根源的な人間の条件を示唆している。「未確定動物」「新しいことを始める動物」など、多様な形で表現される人間のこの存在論的次元は、多様な「実現できること」をめぐる議論の発生を社会

的にも促すことになる。個体の持つ出発点や磁場の違い、状況認識の違い、「実現すべきもの」についての感性の違い、こうした要素は一つに収斂する保証を欠いた意見の塊を生み出すことになる。

かくしてまさに政治的統合は意見の相違を前提にして成り立つ概念であるという指摘が如何に自然であるかが理解できよう。従つて問題は、先に挙げた試みのようにこうした意見の相違という人間的・社会的現実をなくすことではなく、それを如何に取り扱うか、そのためにどのような工夫をすればよいかに移ってくる。他方から言えば、雑然とさまざまな意見が流通するだけでは、政治的統合に無縁な無秩序に陥りかねず、それを防止することも念頭に上らざるを得ない。⁽⁷⁾ 政治的統合はいわば対立なき統一、統一なき対立、この二つの狭間に位置していることになる。

多様なものの単なる暴走を抑制するための方策として用いられるのが、制度の活用、権力の制度化である。政治的統合を行うためにはその担い手が必要である。この担い手は自らの決定が正当なものとしてメンバーに受け入れられ、その決定を実行できなければその役割を果たすことができない。そのためにはまず、政治的統合の担い手としての地位や権力を正当な形で手に入れただけで問題になる。ここには正当な権力者の誕生に関わるさまざまな制度（王位継承法から民主制的な選挙に至るまで）やルールの問題が介在する。こうした制度やルールへの違反によって誕生した権力者は篡奪者として排撃の対象になったが、このルールの中に物理的強制力の行使によつても正当な権力が成立するといった議論（例えば、革命に関わるもの）まで含めると、歴史的にはこの制度やルールの内容はそれほど明確なものではない。いずれにせよ、政治的統合を行うためには担い手がいないならば、その決定が正当な形でなされなければならない。

こうした政治的統合が机上の決定に止まるのでは意味がない。それは実行され、更にはそれなりの結果を出さなければならない。い。

(8)、その決定に集団のメンバーを協力させ、必要にに応じてそれに従わせる権力が欠かせないものとなる（強制の要素）。政治活動が結果との関連で考察されなければならないということから、およそ政治といえは権力と切っても切れない関係にあるという議論が出てくる。しかし、政治と権力との関係について言えば、政治には権力行使が不可避的に付きまとうといった議論から、政治は権力に尽きるといふ議論まで、実のところその幅はかなり広い。この幅のどこに着目するかによつて政治も

権力も異なった相貌を帯びて現れる。

(9)

、集團内部の合意の水準が高ければ、権力に付きまとう強制の要素を動員する

必要は少なくなるであろうし、それが少なければ、先に挙げたような意見の相違を強制に軸足をおいて押さえ込むことも起こる。

政治的統合の実相はわれわれ人間の姿と広く重なり合っている。人間は一定の社会的・歴史的条件の中で予見性と計画とを持ちながら可能性を追求して生きる動物である。「実現できること」をめぐっての計画や予想は人間に行動指針を与え、行動に方向づけを与える。⁽¹⁰⁾「実現できること」の両脇には「実現していること」と「実現すべきこと」という微妙にニュアンスの異なる

二つの領域が接続している。

「実現していること」というのは、当然予想してよい現実が存在することへの確信を表明したものであり、比較的固い現実があるという形で行動に方向性を与える。ここから「実現できること」へのこだわりさえも失い、受動的で無批判的な現状維持が帰結することになる。ただし、「実現していること」ないし現実を決して静態的な、不動の「あるモノ」ではない。個人が直面する現実によせよ、集團が直面する現実によせよ、それは不断に流動性を帯びている。平たく言えば、どこかで誰かが常に新しい企てを行い、それを変容させている。従って、「実現していること」を維持しようとするならば、自らも働きかけ、そうした変容の試みに応対しなければならぬ。政治学的に言えば、権力関係は一瞬たりとも不動ではあり得ない。作為も不作為も一定の効果を持つ。更に、どこまで何を「実現していること」と捉えるかは、主体の関心や感性、能力によって大きく異なっている。何を「実現していること」と考えるかは、これまた流動的であり得る。「実現していること」の境界についてカイギ的になればなるほど、「実現できること」との接点⁽¹¹⁾が逆に浮かび上がってくることになる。

これに対して「実現すべきこと」への着目は、ロゴスにこそ真の現実があるというプラトンのイデア説に代表される観念論にまでたどり着く発想であり、目の前の現実⁽¹²⁾はむしろキョソウないし「あるべきでないもの」という形で人間の行動を方向づける。それは現状打破や変革を志向するものであって、その意味内容はさまざまであるが、いわゆる高い志や理想主義といわれる範疇^{はんちゆう}はこれに属する。これらは新しい現実を創造することについての人間の能力に対する信頼感を背景にしている。

この種の発想は、目の前の「怪しからぬ」現実をさながら「画布の汚れを拭き取る」ように抹殺するものであるならば、それ

は政治と権力の制度化を否定し、意見の多様性を否定して暴力による変革を求めることに直結する。ここにマックス・ウェーバーが言うように、高い理想主義がしばしば政治化することによって「悪魔と手を結ぶ」というパラドックスがくつきりと浮き彫りになるのは避けられない。理想主義がそうした道を選択せず、多様性を念頭に置きながらその実現を模索するならば、それは「実現できること」を模索することに限りなく接近するであろう。

(佐々木毅『政治の精神』による)

注 マキアヴェッリ……十六世紀イタリアの政治思想家。 マックス・ウェーバー……二十世紀初頭のドイツの社会学者。

〔問一〕 空欄(1)(8)(9)に入れるものとしてもつとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

(1)

D	C	B	A
たとえば	しかし	それゆえ	すなわち

(8)

D	C	B	A
しかし	もちろん	あたかも	したがって

(9)

D	C	B	A
ただし	ところが	たとえば	すると

〔問二〕 傍線(2)(4)(6)(11)(12)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問三〕 傍線(3)「真理と権力の一体化」とあるが、次のアイオのうち、その内容として適当なものに対してはA、適当でないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 何をすべきかを権力者が何の根拠も示さずに決定してしまうこと。

イ 唯一無二の真理が、異なる考えの人々を排除することなく政治的に統合する求心力として機能するということ。

ウ 真理を把握した者に権力が与えられ、その真理を受け容れない者は排除されるということ。

エ 恐怖を与えて権力を維持する方法とは異なり、科学的な根拠が期待できるということ。

オ 意見の対立を許容しつつ、皆が納得する共通見解を抽出しこれに基づいて政治的統合を進めること。

〔問四〕 傍線(5)「人間の介在なしには神は政治的統合の支えにはならない」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 何が正しいかを決めるのが神であるとしても、人間がそれを実現しないと政治的統合は果たせない。

B 神の真意を政治的統合の求心力たらしめるには、それを人間が言葉で把握し表現するしかない。

C 共同体が神の導きに従って政治的に統合するためには、王が神の声を聴く預言者でなければならぬ。

D 人間が神の真意を理解したとしても、その真意が実際に実現されるとは限らない。

E 神が決めた正しさの基準が具体的に何であるかについて、必ずしも人々は異なる見解を持つわけではない。

〔問五〕 傍線(7)「政治的統合はいわば対立なき統一、統一なき対立、この二つの狭間に位置している」とあるが、次のアイオの

うち、その説明として適当なものに対してはA、適当でないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 政治的統合は対立の解消を目指すのではなく、対立を残したまま全体としての方向性を決めることを目指す。

イ 政治的統合は真理による統一でも、恐怖による統合でもなく、その中庸を行くべきである。

ウ 政治的統合とは真理がないことを前提に皆が自由に意見を述べ合うことである。

エ 政治的統合は対立の激化により社会が崩壊することを避ければ実現する。

オ 政治的統合は権力の担い手を誕生させる制度やルールとは相容れない。

〔問六〕 傍線(10)「実現できること」の両脇には「実現していること」と「実現すべきこと」という微妙にニュアンスの異なる

二つの領域が接続している」とあるが、「実現できること」とはどのようなことか、「理想」と「現実」という語を用いて五十字以内で説明しなさい。(句読点は一字に数える。)

〔問七〕 次のアイオについて、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 真理と権力の一体化モデルは、主体間の対立を解消することで政治的統合が問題として消失することを目指している。

イ 無為にして治まるという『論語』の理想はひとりでは実現される政治的統合の実例である。

ウ 意見の相違する諸個人を政治的に統合するために強制は必要ない。

エ 政治的統合の担い手は「実現していること」よりも「実現すべきこと」を重視する。

オ 個人の選択は政治的統合が社会全体としてもたたらす選択より低い価値しか持たない。

二 二次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(20点)

ゲノムの塩基配列レベルでは、人間は九十九・九%平等である。しかし遺伝子レベルでは、同じ遺伝子の組み合わせをもつヒトは一卵性双生児を除けば皆無であり、その違いが社会の中のままさまざまな個人差のおおよそ半分をつねに説明する。人間は生まれつき等しいわけではない。遺伝的に等しくない人々が集まってもに生きる社会において、遺伝的な差異が理由で、能力に差があり、成功の機会に差があり、収入に差があり、社会的地位に差があり、受ける社会的尊敬や自尊心の程度に差があり、衛生や健康の度合いに差があり、寿命に差がある。じつに不愉快な現実である。

遺伝マインドから見たとき、もつとも違和感を感じるのには、こんにちあるこうしたさまざまな社会的不平等の現実が、遺伝ではなく、環境によつて、あるいは本人の心のもち方によつてつくられたものだと考えたがる風潮があるということだ。たとえば中学生時代、多くの生徒は努力して勉強しているのに、ある子どもは努力しなかつたために成績が悪く、そのためによい学校に進めず、高校に進んでも悪い友だちができ、遊んでばかりいて中退し、まともな仕事に就けないために貧しく、すぐに子どもができ、その子もろくにしつけられず、その子が学校が上がってもまともな努力せず……という俗に言う「負の連鎖」の原因は、もつばら社会的環境、もしくは本人の心構えのせいであり、遺伝によるものでは断じてないと考える人々が少なくない。

もし遺伝的な差異による不平等を正当化する社会を優生社会とよぶならば、われわれの社会はこんにちまさに紛れもなく優生社会である。環境が平等だと考えられ、心構えを正そうと試みられたところに、なおかつ生じた差異と不平等は、もはや本人の責任として正当化されてしまうからだ。ちゃんと機会を与えてあげたではないか、いけないところを指摘し訓練までしてあげたではないか、それでもダメなら、もうそれは君自身の責任だよ、と。

このいい方にとまどいを覚える読者は少なくないはずだ。負の連鎖の原因を遺伝ではなく環境や本人の心構えに帰するのは、それしか解決の方法が思いつかないからである。環境なら設計的改变が可能だ。心構えも気持ちのもちようで何とか変えられる。しかし遺伝といわれたらもうどうしようもない。かつてナチの優生社会では、社会悪を遺伝のせいにしたために、ユダヤ人虐殺

まで正当化してしまったではないか。今またそれを繰り返そうというのか……、と。皮肉なことに、こうして (1) ことに
寄与しているのである。

このことを認めることにも語ることに多大の勇氣が必要である。社会の不平等が環境条件や心構えの違いによってつくられて
いるという信念によって支えられている社会には希望がある。いくら事実に戻していようと、環境条件を整え、しかるべき心
構えが持てるような社会に改変すれば、平等が実現すると信じられるからだ。それが今の私たちの社会である。みなそれぞれを信
じ、そこに希望を見出そうとしているところに、遺伝要因をもちこもうなどというのは、 (2) だけだろう。遺伝子で自分

の行動を説明されるのは、それがよいことであろうと悪いことであろうと、たいがいきわめて不愉快だからである。このように
本当のことをいって (2) 者は、ソクラテスのように、殺されなければならぬ。

(3) 遺伝マインドに希望はあるのか。

それは遺伝マインドそれ自体にある。すなわち遺伝マインドに立脚した環境設計であり、その根底にヒトの進化的・遺伝的本
性である利他性を据えることである。

遺伝要因の差を無視した環境の平準化は、 (4) を、ロナルド・ドーアもリチャード・ハーンスタインも、それぞれ別々
の文脈で同じように指摘している。その差が一方は総理大臣、他方が会社の万年平社員で、給料が十倍ちがっていても、一方が
プライベートをすべて犠牲にし、何をやってもつねに厳しい批判にさらされ、そのつらさを本当に理解してくれる人はいない立
場と、もう一方が自分の時間を楽しみ、友人に恵まれて仕事もそれなりに評価され、家族みんなが自分は中流でそこそこ幸せと
感じられる立場の範囲にとどまっていればまだよいだろう（一億総中流と思えていた昭和後半の日本はそれに近かったのかもし
れない）。しかし金が金を生んで六本木の超高級マンションでぜいたく三昧さんまいの暮らしをする人がいる一方で、子どもの頃から人
にさげすまれ、路上生活を余儀なくされて、だまされいじめられ続けながら飢えと病とともに一生を終えなければならぬ人た
ちがいる今の日本を、環境マインドだけで眺めて安心した気になるのは、もはや欺瞞ごまか以外のなものでもない、遺伝マインド
をもった目からは見えてしまう。「私の恵まれた生活は、私の知恵と努力のたまものであり、それに見合った報酬をもらって

るにすぎない、なんの文句があるのか」。たしかにそうだろう。しかしそういうあなたは、たまたま遺伝的にも恵まれていたのだ。あなたが人よりも有利な才能、社会的地位、経済力に恵まれたのは、あなたの努力や運だけではなく、あなたがたまたまもってしまった遺伝子たちの組み合わせのせいでもある。そのあなたが恵まれているために、別のところでたまたま遺伝子の組み合わせが悪かったことから、その恩恵に恵まれない人たちがいるのである。こう解き明かしたとき、心の奥に眠っていた利他性がより強く始動する人がいるのではないか。そして何かを発動させ行動に移してくれるのではないか。

己のふるまいと立場を振り返ると、これ以上この問題について雄弁に語るのは、それ自体が欺瞞になりそうだ。だがもしあなたが遺伝的な理由でこの社会で恩恵を被っていると思えるようだったら、遺伝的不平等からくる悲しみを少しでも乗り越えるには、遺伝マインドに立って、自分のできるところから平等を考え、遺伝的条件がたまたま不利だったために恵まれない状態にいる人たちのために、自分の今のできる仕事をどう捧^{ささ}げるかを考えることが、もっとも等身大の貢献ではないかと思われる。

（安藤寿康『遺伝マインド 遺伝子が織り成す行動と文化』による）

注 遺伝マインド……筆者の造語。人間一人ひとりの心（マインド）が遺伝の影響を受けているという事実を見据えて、人間と社会、そして人間と自然との関係を考える枠組みのこと。ロナルド・ドーア……イギリスの社会学者。『学歴社会

新しい文明病』の著者。リチャード・ハーンスタイン……アメリカの行動学者。『IQと競争社会』の著者。

〔問一〕 空欄(1)に入れるのにもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ナチスまで持ち出して遺伝的な差異による不平等を否定することが、環境マインドを正当化する
- B われわれの社会的平等を目指す気持ちの持ちようが、負の連鎖の原因を環境や本人の心構えに帰する
- C 二度と優生社会をつくるまいと遺伝要因を否定するその考え方が、事実上の優生社会をつくり上げる
- D 環境を平等にしようとするのが、かえって遺伝の不平等さ、生まれつきの能力の差異を明らかにする
- E 社会的不平等の原因を遺伝に求めることを忌避する思考が、環境の影響を否定することで不平等を再生産し続ける

〔問二〕 空欄(2)に入れるのにもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 偏見をもたらず
- B 人心を惑わす
- C 静寂を乱す
- D 矛盾を来す
- E 社会を汚す

〔問三〕 傍線(3)「遺伝マインドに希望はあるのか」とあるが、「希望」とはどのようなものか。次のア～オのうち、本文の趣旨と合致するものに対してはA、合致しないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア ヒトの能力は遺伝によって決定されるのではなく、環境と努力によってそれを大きく伸ばすことができるということ。

イ 社会的な環境をできるだけ平等にすることで遺伝の不平等を解消することができるということ。

ウ ヒトは互恵的な利他性を持った動物として進化してきているので、それを生かして不平等を埋め合わせることができるということ。

エ 遺伝の違いに応じたさまざまな環境を社会の中に用意することで、それぞれの生き方ができるということ。

オ 遺伝的差異が大きく現れるのは自由度の大きい社会であり、その中で各自が遺伝的個性を大きく伸ばせるということ。

〔問四〕 空欄(4)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人々から希望を奪い、その結果社会を劣化させるだけであること
- B 社会悪を遺伝に帰するような優生社会を生み出すだけであること
- C 競争の無意味さを印象づけ、人々を無気力にさせるだけであること
- D 結局は遺伝的差異が不平等の原因であることを否定するだけであること
- E 結果的には平等をもたらさず、遺伝的差異を顕在化させるだけであること

三 次の文章は、平兼盛をめぐる二つのエピソードである。これを読んで、後の問に答えなさい。(30点)

A

(1) 兼盛、陸奥の国にて、閑院の三のみこの御むすこにありける人、黒塚といふ所にすみけり。そのむすめどもにおこせたりける。

I みちのくの安達が原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことか

といひたりけり。かくて、「そのむすめをえむ」といひければ、親、「まだいと若くなむある。いまさるべからむをりにを」といひければ、京にいくとて、山吹につけて、

II 花ざかりすぎもやするとかはづなく井手の山吹うしろめたしも

といひけり。

さて、この心かけしむすめ、こと男して、京にのぼりたりければ、聞きて、兼盛、「のほりものしたまふなるを告げたまはせ」⁽⁴⁾といひたりければ、「井手の山吹うしろめたしも」といへりける文を、「これなむ陸奥の国のつと」とておこせたりければ、

男、

III 年を経てぬれわたりつる衣手を今日の涙にくちやしぬらむ

といへりける。

B

名取のみ湯といふことを、恒忠の君の妻よみたりけるといふなむ、この黒塚のあるじなりける。

IV 大空の雲のかよひ路見⁽⁵⁾てしがなとりのみゆけばあとはかもなし

となむよみたりけるを兼盛のおほきみ聞きて、おなじ所を、

V 塩竈しほがまの浦にはあまや絶えにけむなどすなどりの見ゆる時なき
となむよみける。

(『大和物語』より)

注 井手……京都の地名。 つと……土産。 名取……宮城県の地名。 すなどり……漁をすること。

〔問一〕 傍線(1)「兼盛」は文章中でどのような語で表されているか、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 閑院の三のみこの御むすこ B 親 C こと男 D 男 E 黒塚のあるじ

〔問二〕 傍線(2)「おこせたりける」の解釈として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 兼盛が娘たちに歌をおくった
B 娘たちが兼盛に歌をおくった
C 親が兼盛に自分の娘たちへの歌を催促した
D 兼盛が娘たちに歌をつくらせた
E 兼盛が娘たちに歌を書き留めさせた

〔問三〕 Iの和歌で「鬼」と表されているものは、IIの和歌ではどのような語で表されているか、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A すぎ B かはづ C 井手 D 山吹 E うしろ

〔問四〕 傍線(3)(5)の解釈として、もっとも適当なものをA～Dの中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(3) 「さるべからむをりにを」

- | | |
|---|--------------|
| A | もう遅いというのに |
| B | ちようどよいときに |
| C | 折ってはいけないのに |
| D | 去るべきときではないから |

(5) 「見てしかな」

- | | |
|---|-------------|
| A | 見たいものだ |
| B | 見るしかない |
| C | 見てしまった |
| D | 見ようかどうかしようか |

〔問五〕 傍線(4)「のぼりものしたまふなるを告げたまはせで」について、その心情の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ずっと待っていたのに、都に来ていらっしやったらしいことを教えてくださらないので残念に思っている。
- B 上の方でじっとしていらっしやることを教えていただけただけことをうれしく思っている。
- C 上京いたしますと手紙をくださったので、会える日を心待ちにしている。
- D 参内なさるとおっしゃらなかったなので、お会いできそうにないと悲しく思っている。
- E 昇進なさるとお知らせをいただいたので、お祝いしたい気持ちでいっぱいである。

〔問六〕 Ⅲの和歌にこめられた心情の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 以前、陸奥の国でからかった女が京に来たので声をかけてみたら仕返しされてしまい、恥ずかしく思っている。
- B いつか結ばれようと約束していた女がいつの間にか浮気していたので、悔しく思っている。
- C 何年も着ている衣装が涙で濡れて、ぼろぼろになってしまったのを残念に思っている。
- D 先祖代々伝えられてきた衣装を今日やっと手に入れることができ、感激している。
- E 長い間、女のことを思っていて待っていたのに、ひどいしうちを受け、悲しみにうちひしがれている。

〔問七〕 Ⅳ、Ⅴの二つの和歌に用いられている技法の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A Ⅳの「大空の雲」は「あととはかもなし」を導く序詞である。
- B ⅣとⅤには、いずれも「名取のみ湯」という題が隠されている。
- C Ⅴの「塩竈の」は「浦」の枕詞である。
- D Ⅴの「けむ」は「けむ」と「煙」の掛詞である。
- E ⅣとⅤはともに、体言止めで余韻を残している。